

扉周りの枠は種車が7000系1次車の7710、7810、7910は下部が広がった形状になっている。種車が2次車の7708、7808、7908は広がっている範囲が側面コルゲートの高さいっぱいまで大きくなった。種車が3次車以降の車両は広がりがなくストレートになった反面、全体的に枠が太くなっている。

また、靴摺りは車体外側に向かって直角に曲がり、下部へ伸びているが、元7000系1次車はその長さが他車より若干長く、2次車から短くなった。3次車からは横方向に長くなり、ドア開口部の曲線部に食い込む形になった。

乗務員扉まわり

乗務員扉の窓枠にはねじが留められており、横方向は2個、縦方向は5個の車両が多いが、7713、7715、7913、7915は6個である。

扉下部にある靴摺りは車体外側に向かって直角に曲がり、下部へ伸びているが、その長さは長短2種類あり、種車が7000系2～8次車の車両(7703、7708、7713、7903、7908、7913、7914)は下側に長く伸びている。

また、扉の上には水切りがあり、種車が7000系1～2次車の7708、7710、7908、7910は深くカーブを描いた形状だが、それ以外の車両はカーブが浅くなっている。

先頭化改造車の7715、7915は他車とは大きく異なっている。扉幅は他車の450mmに対して9000系や1000系と同じ470mmであり、設置位置も扉中心基準で連結面方に70mm下がっている。扉上部の枠の角にはRが付いているが、7200系以降と同じく外側のRがきつくなってお

り、遠目では直角にも見える。靴摺りの下部への伸びは短いタイプであるが、種車が7000系1次車や9～10次車の車両と比べるとねじの有無など若干の差異が見られる。他にも把手の位置が上がった一方、2か所ある鍵穴は低くなり、手すりに掛からない位置となった。

側灯

7000系時代は半球形の戸閉灯(赤色)のみが設けられていたが、7700系化にあたり従来の戸閉灯を非常灯に転用、中央の側引戸を挟んだ反対側に新たに縦長小判形の戸閉灯を新設した。また、電動車は上り方車端部に過負荷灯(無色)が設置され、車側灯は片側あたり3灯となった。戸閉灯は以前はLEDによる発光であったが、最近になって電球2灯化された。

サハ7950形から改造された7715、7815は、電装化にあたり過負荷灯が追設されたが、レンズが台座付きとなっている。また、この2両はサハ時代の名残で、戸閉灯と非常灯の位置関係が他車とは逆になっている。



【車側灯】

(左)小判型の戸閉灯。写真は電球2灯化後の現在のもの。(7907) / (中央)7000系時代の戸閉灯を転用した非常灯。(7707) / (右)サハ改造車の過負荷灯は台座付き。(7715)



【乗務員扉まわり】

(左)靴摺りは下部への伸びが短いタイプ。水切り形状もカーブが深い。(7910) / (中央)靴摺りは伸びが長いタイプ。(7914) / (右)先頭化改造車の扉は位置や形状が異なる。車端部のジャッキアップポイント周りの違いにも注目。(7915)

水切り、雨樋

7000系時代は側面上部に水切りが設けられていた。種車が1～2次車の7708、7710、7808、7810、7908、7910はJ字型に折れ曲がった形だったが、3次車以降の車両は折れ曲りがなくなり、斜め下を向いた形になった。

7700系化にあたり、元の水切りは残したまま雨樋が追加された。初期改造車(7701、7702、7801、7803、7901、7902)は元の水切りの上に雨樋が乗せられたが、それ以降の改造車はより高い位置に大型の雨樋が設けられた。